

審査委員長講評

本年度も、千葉市総合展覧会科学部門が、市内各小中学校から出品された優秀な科学論文や創意工夫を凝らした科学工夫作品1,000点あまりを集め、千葉市科学館（きぼ一）において9月21日～23日の3日間の会期で開催されました。市内各小中学校の児童・生徒の皆さんが自然や身近な生活の中に疑問や課題を見つけ、これまで学習して身につけた知識や経験を生かして、観察や実験を繰り返してまとめ上げた“科学論文”と、日常生活の中で「こんな物があったら便利だろうな。」「こんな物があれば楽しいだろうな。」という夢のある“工夫作品”が所狭しと並べられました。開催が3連休とあって、会場には連日多くの児童・生徒の皆さん、そして保護者の皆様や市民の皆様が訪れ作品を鑑賞していました。会場に来た方に、出品者本人が作品について紹介している場面も見られ大変好評でした。今年度から、科学館の7階だけでなく、1階のアトリウムも利用して展示を行ったため、例年よりも参観者にとって見やすい展示となりました。

今年度の作品の傾向を簡単にまとめますと、科学論文では、

- ① 身の回りに起こる自然現象に関心をもち、観察や実験を根気よく続け記録をとり、多くのデータから規則性を発見したもの
- ② 生命の不思議さに感動し、動植物の生態を解明するために長期間にわたり継続して調査研究したもの
- ③ 日常生活の中で生じたさまざまな疑問について、いろいろな条件のもとで実験を行い、結果を分析し、その機能を解明したもの
- ④ 環境問題に興味をもち、長期間にわたり調査研究を行い、環境の変化を明らかにしたもの

など、質の高い、児童や生徒の皆さんの豊かな発想にあふれた興味深い作品が数多くありました。特に中学校では、資料収集やデータ処理でパソコンを使い写真や表やグラフなどを上手に活用してまとめた作品もあり、情報活用能力の面からも将来が楽しみです。

また、工夫作品では、

- ① 学習した科学の知識を活用したゲーム性の高い楽しく遊べる作品
- ② 環境に配慮した材料やリサイクルした物を利用した作品
- ③ 日常生活にあるととても便利な実用的な作品
- ④ 環境を意識した「エコ」に関する作品や耐久性にも優れた作品

などが目立ちました。

さらに、10月に行われた千葉県児童生徒・教職員科学作品展に千葉市総合展覧会の代表作品が出展され、千葉県知事賞や千葉市教育長賞、千葉県教育研究会理科教育部会長賞、千葉県発明協会会長賞、読売新聞社賞を受賞するなど、多くの作品が大変優秀な成績を収めました。これは、千葉市の理科教育の水準の高さを示していると言っても過言ではありません。また、児童・生徒の皆さん自身の努力と、保護者の皆様や理科担当の先生方の協力や努力の成果でもあります。こうした成果を土台にして、ますます千葉市の理科教育が充実していくことを願っています。

結びに、本科学論文集の作成に当たってご協力いただいた児童・生徒の皆さんや保護者の皆様、またご尽力いただいた担任や理科担当の先生方に感謝を申し上げます。自然事象の不思議さや、すばらしさ、それに取り組む児童・生徒の皆さんの生き生きとした活動が見て取れるような作品に、来年も出会えることを期待して講評と致します。

千葉市総合展覧会科学部門 審査委員長
千葉市立幸町第一小学校長 檜原 修